明代建州女直史研究

園田一龜著

昭和二十三年五月　東京國立書院刊

A五版　二八〇頁　定價二〇〇圓

本書は東洋文庫論叢の第三十一册として刊行された、特殊な專門

學術書である。その研究對象である明代建州女直は、言ふ迄もなく他の海西女直、野人女直と共に、明代滿洲の地に活躍したツングース系種族の一であつて、特にそれがやかましく喧傳されるのは、清王朝がこの部族から出たことによる。卽ち滿洲朝廷のもつ色々な性格は、この時代迄遡ることによつて多くの事實が明かにされ得るといふのである。もつともその他に、滿洲の地が曾つての我が國大陸政策上の重要な關心地であつた關係上、この地を對象とする研究が盛であつたことにも起因する。所謂滿洲學問で、我が國東洋史學に於ては、曾つては最も學的水準の高かつた一分野であつた。幾多のすぐれた學者がこの研究に參加し、それ等はかの「滿鮮地理歷史研究報告」の諸冊となつて結實された。その精緻を極めた實證的な學風も、又その特色であつた。その中、明代女直の研究に關しては、池內博士津田博士故稻葉博士等の數多くの論證があり、それ等はやがて現東大教授和田博士に引きつがれ、特に同教授の「明初の滿洲經略」はその博大なる史料に透徹せる批判を以つて、この方面の研究に不動の礎石を築かれたものといへるであらう。

園田氏の本書は、和田教授の築かれた礎石の上に傳統的な學風を以つて、明初より更に淸の太祖の興起前迄に汎つて試みられた、實に綿密を極めた研究である。方に滿鮮地理歷史研究の衣鉢を繼ぐものといへよう。

更に本書を特色づけるものの一は、數多くの肩のこるやうな引用文を取扱ひながら、極めて明快流暢な文章論理にある。この著者の手腕は方に氏の人となりの故でもある。氏は通例の學究の徒の如く、學窓を出て研究室生活を送つたものと類を異にし、長く滿州の地に居られ、操觚の業に從はれた篤學の士であつた。氏の滿州の風物や文化を愛される情熱は、やがてそれ等の歷史研究となり、曾つて奉天圖書館叢刊に見られる數々の研究發表となり更に好著「韃靼漂流記の研究」となつた。だがこの時迄の氏の學風にはどちらかといへば好事家的の影が見られたが、遂に滿鐵調査課に入られて專門家として立たれ、滿州金石志稿第一篇がものされた。次いで滿州の地より東洋文庫に留學され、その研究の研鑽はやがて本書によつて實を結ばれたのである。もつて本書が尋常のものでないことが分るであらう。

次に本書を具體的に紹介しよう。本書は第一章序說、第二章建州衛と同左衛の濫觴、第三章建州衛と朝鮮との軋轢、第四章建州左衛の西遷、第五章建州三衛の東遷、第六章毛憐衛女直の朝鮮侵寇とこの六章から成立つて居る。

先ず序に於て著者は研究の態度を示され、正確には「支那及び朝鮮の史料を通じて觀た建州女直史の研究」と題すべきであり、支那史料は明實錄を、朝鮮史料は李朝實錄を根本史料となし他の多くのシナ史料は觀るに足らぬとされて居る。方に著者の言葉の通りで、筆者も全く同意見である。第二章は明の永樂帝の時に於ける建州衛及び左衛の設立に筆を起し、その限りに於て著者も斷つて居る如く叙述の大要を和田教授の「明初の滿洲經略」に據り、隨時他說を批判されて居る。例へばこの方面の權威である鴛淵博士の建州左衛設立の年次を永樂四年とするに對し、著者は十年以後說をとる等である。

建州衛三代の李マンジュの時、その本地であつた吉林鳳州山城よ

り鴨綠江の支流渾江の峽谷の地に移るに及んで、第三章が始まり著者の研究も始まる。卽ち李マンジュがその王國再建に必要な食糧、種子及び耕農技術者の獲得の問題から朝鮮との交渉を持つに至り、鮮廷又歷代の傳統的政策である東北女眞の懷柔政策を以つてこれに應じ、加へて明廷この間に介入してここに複雜怪奇な外交戰が展開され、遂に朝鮮の再度に汎る李マンジュ討伐となつて、彼が西遷する事情が說かれてある。第四章は建州左衛が、その始祖メンゲチムールを失つた後、始祖の弟フアンチヤ及び始祖の相續者チュンシヤンを中心とする、その再建の經過、チュンシヤンと李マンジュの婚姻、更に彼等の撫順東方蘇子河河畔への西遷とそれを阻止せんとする鮮廷の干涉及び左右衛の設立の事情が詳述され、第五章では、當時蒙古に猛威を振つたオイラット蒙古の東漸による建州三衛の東方後退と、之によつて生ずる朝鮮との復交と明廷の干涉、第六章に建州衛の一分派である毛憐衛と朝鮮との關係が說かれてある。本書は上卷として、右に說かれた史實の後、淸太祖の興起迄の研究は下卷に豫定されてある。

以上が本書の內容の槪要であるが、豐富な史料が縱橫に驅使され且ときほぐされて、史實が見事に浮彫にされて居る。歷史の第一步は、先ず基礎的史實の正確なる解明にあること言を俟たないが、それは言ふべくして實は容易ならぬ仕事である。殊に尨大なる明實錄及び李朝實錄を飜讀整理するだけでも、大した努力と時間を要することは、一度そのことに當つた人の齊しく銘記する所で、況んやそれ等を基にして研究をすゝめることは一朝一夕に出來るものではない。それ等をよく克服されて、これ迄に體系づけられた著者の學問的眞しさに深く敬意を拂ふものである。今や本書の上に各人は、その好む立場を自由に築くことが出來るであらう。我々は本書に於いて强固な足場をもつものであり、本書の最大の價値は又ここにありといへよう。

以上の紹介によつて本書が卒讀直ちに論ばく出來る種類のものでないことを明にしたが、一二の考證に就いては尙疑義があるやうである。もつともこれだけの大著となれば、史實の解釋に意見の分れるのは當然で、實はおざなりの批評では著者に相濟まぬと考へて讀んで居る中、著者の引用されて居る史料から、違つた解釋が成立つことに氣がついた。もつとも人の褌で角力をとる嫌があつて申譯けないが、批評といふことにして免じて頂くことにする。それは主として、李マンジュの婆チョ江時代の住地である瓮村及び問題の吾彌府に就いてである。然し人のばかりでなく、著者の用ひられた申忠一の圖錄ともう一つ、故內藤先生から見せて頂いた北鮮から滿州にかけての鳥カン圖風の地圖の寫しを參照したことを附加せねばならぬ。この地圖の原圖と思はれるものは、後京城の朝鮮史編修會で瞥見したが今メモを失つたので、正確にいへないが、李朝世宗頃のもので確かなもののやうに思ふ。而して遼東に關しては實は頗る簡單で、この地圖だけでは何も分らないが、申忠一の圖錄と比べると始めて納得がいくやうである。それによると、今の渾江、實錄の婆チョ江と富爾江の合流地點より北方に吾彌府と記し、更に新開河と婆チョ江との合流地點と覺しき箇所より、流に沿ふた北の所に「李滿住」と記して居る。內藤先生はこれは妙なものだといはれたが、これが筆者の考への出所である。

先ず瓮村であるが、著者は實錄の「兀剌山瓮村」とある記事によつてこの地をウラ山卽ち今の桓仁縣北方五女山の南麓の邊りと想定された。この比定はどうであらうか。李テンの西征錄に李マンジュ討伐の朝鮮軍の中、本隊である中軍は朝鮮の江界より瓮村、吾自站、吾彌府に赴くべく、滿浦鎭より鴨綠江を越えたとして居る。この交通路は後年申忠一が淸太祖の居城を探りに赴いた時の通路で、滿浦からは之が唯一の路なのである。卽ち大板嶺をこえて、新開河に沿ふて下り婆チョ江に出るのである。圖錄に新開河と婆チョ江との合流地點の少しく北よりの所に「土城」の存在を指摘し、ここが淸太祖實錄に見えるワンギヤ部長ダイドメルゲン、圖錄の李大斗の一黨の住地として居る。彼等が李マンジュの後裔であることは疑ひない所であるが、圖錄にこの邊の地名を「王家」として居る、王家は鮮音 ong-ja で瓮 ong 村と同一であることが分るであらう。圖錄にこの地胡家四十座ありとして居るが、實錄に李マンジュ三十餘戶を率いて瓮村に住んだといふから、兩者共略々以たやうな村落の自然地理的狀況である。そうすると、內藤先生が示された地圖と合はせて、圖錄の王家の土城が李マンジュの住んだ實錄の瓮村であることに間違もあるまい。東國輿地勝覽がこの地を、滿浦を去る二百七十里の地點として居る。著者は滿浦より三四日の行程と想定して居られるのは正解で、申忠一は凡そ四日をかけてこの邊に來て居る。著者は思ふに餘りに兀剌山の文字に抱泥されたのではあるまいか。

前述の中軍の行動豫定より推定すると、吾彌府もこの方面に求められねばならないやうである。

吾彌府の位置比定に就いては、著者も例示されて居る如く、既に先人に諸見解あり、故稻葉博士の滿浦對岸の洞溝谿谷說、更にこの考へを承ける廣島文理大鶯淵博士の說、又津田左右吉博士の桓仁縣城說があるが、著者はその何れの說も記事解釋の妥當でないことを指摘されて、自らは自己の實地踏査の見聞と史料解釋の上から、この地を富爾江上流の北古城子と比定されて居る。

然し著者が例へば津田博士の解釋中、征討軍の一であるウラ山城方面に向つた左軍が引還して婆チョ江を渡るといふ李朝實錄の記事は、文飾に過ぎないとして、津田說が餘りに江を渡ることに抱泥し過ぎて居ると指摘されたのはいかがなものであらうか。中軍は一度も婆チョ江を渡つて居ないから、左軍がこれに合流する爲には江を渡るべきで、實錄の記事を高く評價される著者が、この一句だけを特に獨斷的に贅言とされるのはいささか腑におちないやうである。その他一二著者の解釋にも弱い所が見受けられる。

所で筆者はこれ等諸家と根本的に解釋を異にするものである。卽ちこれ等諸家の說は、思ふに吾彌府の府字に拘泥されて、これを飽く迄、一個の山城名、少くとも地名と解すべきとされたのではあるまいか。私は吾彌府は河の名稱、引いてはその河の流域一帶の呼稱とするものである。著者は吾彌府が又兀兒彌河、吾乙面川、吾未何、兀獺府の異稱あることを例示されて居る。これ等の用例を見れば、一見して府 fu は河 ho の音寫で吾彌府は「ウミ川」であらうことが想定される。實錄の記事をよく讀むと、吾彌府が河名であることを想はす叙述が多く、例へば「婆チョ江を過り、馬行一日程にして吾彌府洞あり、源深く流長し。その水南流して婆チョ江に合す」とあり、又「地名吾未何、吾未何以南半日程にして、地名婆チョ江—

吾未何の西邊に兀剌山城あり」とある通りである。而してこの記事から吾爾府の地を比定せば、婆チョ江と富爾江の合流地點より上流の、婆チョ江の別名であることになるであらう。この解釋を決定的にするものは、次の李マンジュの東遷を記す實錄の記事である。即ち「今年三月、還つて兀剌山城瓮村に居る。ファンチヤ・ブカト（注建州右衛の頭目）は即ち居を瓮村迤北十五里吾毛水の地に移し、チュンシャン（注建州左衛の頭目）は瓮村に移居せり」とある。この吾毛水を著者は黑溝河の舊稱とされて居るが、これは勿論「ウミ川」即吾爾府で、瓮村が申忠一の圖錄の王家であれば、吾毛水即ち吾爾府はその近くを流れる婆チョ江であること一見して明かであらう。このやうに解した上で、實錄或は西征錄を讀むとさうたいした矛盾もなく事實の說明が可能なのであつて、諸家の說或は著者の試みられた作爲的解釋は何等必要でないと思ふのである。尙蛇足を加へれば兀剌山城瓮村とは、ツングース系種族の住居が、土城――山城の二重形式から成立つて居るといふその具體的な表現であらう。

結局は著者が吾爾府に關し、豐かな材料をもつて諸家の說を批判されながら尙山城說に拘泥されたのは、餘りにも著名な先人の壓力に眩惑されたものといふべく蓋し又止むを得ないと思ふ。

以上卑見をのべたが、勿論これ等の瑣々たる解釋の相違は、本書の論旨の大局には何等影響のないことは申す迄もない。もつとも、濫りに諸先生の論をあげつらふことになつて、その非禮の譏りは免れないが、より廣き意見の發表が良心的であるといへるので、この點著者からも寬恕して頂けると思ふのである。

既に著者の切々たる序文の如く、異常な悲境を味はれた著者が尙この良心的な力作を出された高邁な學的精神に深く敬意を表し一層の著者の自愛を祈るものである。（三田村泰助）